

ソニー Windows8対応ノートPC「VAIOR Duo 11」

こだわりのタッチペンが切り開く
次世代UIの新たな可能性

従来と比べ操作性が大きく変わったMS「Windows8」が発売されて約半年。個人的にはタッチ操作推奨のUIやデザインに戸惑うことが多い(当方は昨年末に購入、タッチパネル非対応モデル)ものの、その斬新さや将来性には目を見張るものがある。中でも注目、新たな操作UIとしてメーカー各社が一部端末で採り入れたタッチペンだ。今回は、タッチペン対応機種の中でもとりわけ高い完成度を誇るソニー「VAIOR Duo 11」を紹介する。

「VAIOR Duo 11」は、画面タッチ操作にフォーカスした「タブレットモード」と従来の「キーボードモード」をワンアクションで切り替えられるサーフスライダー形式の筐体を持ったWindows8対応ノート型PC。加えてタッチペンにより、従来タブレットとも異なる新たなUIの可能性を切り開いた端末と言える。

薄くて軽く、パフォーマンスも安定とノートPC自体の評価も高い端末だが、唯一無二の特長として評価すべきは「タッチペン操作へのこだわり」だ。「VAIOR Duo 11」におけるタッチペンは単に先の尖った硬質スティック状UIではなく、文字通り「限りなく実際のペンに近いUI」である。

「デジタイザースタイラスペン」と呼ばれる付属のタッチペンは、従来の一般的なものと比較してペン先が細く、逆にグリップ部分は持ちやすいサイズ。筆圧を感知するため任意に太さを調整することが可能で、ワンタッチで修正できる消しゴム用のボタンも付いている。

一方、本体側はタッチパネルガラスとLCDの間に樹脂を挟み込んだ構造(オプティコントラストパネル)。従来使われることの多いエア層と比べて、ペン先位置と液晶表示位置のズレ(視差)が少ないのが特徴で、手書き入力時におけるユーザー側のターゲットズレを軽減することが狙い。

手書き入力の場合、この「ターゲットズレ現象」は大きなストレス要因となり得る。例えば「木」のように中央に接点が求められる文字を書く際、また「飛」のようにパーツのバランス配置が難しい文字を書く際などには顕著な課題となりがちだ。

「VAIOR Duo 11」ではタッチペン側のセンサーも先端に近いところに配置されており、このズレを軽減することにより注力されている。また、



タブレット型・キーボード型がすばやく切り替えられるサーフスライダー方式が筐体上の大きな特徴。なお、開いている状態でもタッチペンは同じように利用可能

別売ではあるが、専用の液晶保護シートをディスプレイに貼り付けることで「紙に書くのに近い書き心地」を再現することにも成功している。

目指したのは
「紙のノート」への書き心地

「ペンをタッチのオペレーションに使うだけでなく、実際のペンとして利用しやすくすることで紙のノート・PCを1台でまとめられる端末を目指した」(VAIO&Mobile事業本部企画1部Hardware

企画1課シニアプロダクトプランニングマネージャー・伊藤好文氏)。前述した書き心地へのさまざまなこだわりは、こうした商品企画が実践されたものと言える。

機能が最大限発揮されるソフトウェアが「Note Anytime for VAIO」。手書きによる自由筆記が可能なソフトで、ノートPCをメモ帳のごとく正しく扱える。また「Power Point」においては手書き・キーボード入力の切り替え混在が可能で、テキスト文字に手書きの図表を組み合わせるといった、従来にない「味のある」プレゼン資料作りが実現できる。

書き心地へのこだわりからは話がそれるが、ペンを活用したソニー自作のアプリケーション「Active Clip」もおもしろい。写真や静止画で特定部分(人物など)の周囲をペンでなぞると自在にトリミングできる機能で、PPT資料作りとの相性も良い。なお、独自の輪郭認識技術を積んでいるため、手入力ながら正確な切り抜きが可能となっている。

ペン先は「硬質」「軟質」の付け替えが可能で、「文字には軟質、図表描画などには硬質が向いている」(伊藤氏)とのこと。鉛筆で考えると間逆の特性なので注意が必要だが、実際利用した感じでは軟質タイプはどちらも万能に利用できる印象を持った。

素早いキーボード入力が必要なユーザー層には不要とも思えるUIだが、「数式や図表など、キーボードでは面倒な入力も簡単になる」(伊藤氏)ことから応用性は広い。指をペン代わりに利用する流れが進む中、あえてペンによる操作にとことんこだわった逸品。スマホやタブレットも含め、近い将来のUI相関図を大きく変える可能性を持った取り組みと言えるだろう。

